

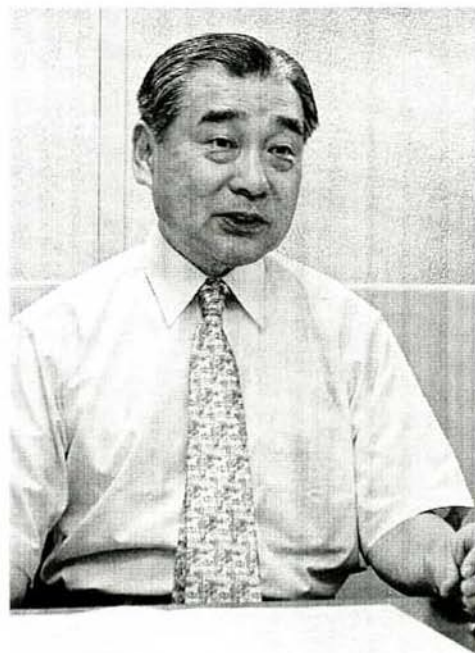
「注意しろ」「危険には近づくな」の 押しつけ教育から内発的に注意する きっかけづくりの教育へ

高山さんは、昨年8月に(社)日本自動車工業会が発行した「セーフティ・アクション21 高校生の交通安全教育」の編集委員を務めた。そのとき、学校における交通安全教育は、一般教科の教育と同列に見ることはできないと改めて認識した。一般の教科は基本的に知識をもつことを成果とするのに対し、交通安全教育は交通安全の知識、例えば、昨年の交通事故死者数とか、赤信号の意味などの知識量では成果を判定しません。それらの知識を自分自身の行動原理に結びつけているかどうかで教育の成果を見る。そこに一般教科との明確な違いがあります。

高校生の心に入っていく教育を

知識は行動原理を決めるモチベーションの一部にはなるが、知識をもてば直ちに行動原理ができるわけではない。安全講習会などではよく事故統計、とりわけ死者の数字などから話が始まるが、聞いている高校生は「またか」という表情で、とたんに会場のあちこちで私語が始まるという。「数値化は理解のきっかけにはなっても、無機質化、客観化された数字の一人歩きは、高校生の心に入っていないのです。個々の人間にとっては1つの死がすべてになる。高校生が真剣に聞くのは、実際の事故の話です。被害者はどうなったか、加害者はどうなったか、親はどうしたか、と話が具体的にあれば必ず関心を示します」。

それでは知識と行動原理の間をつなげるものは何か。「この離間に現場の多くの教師が直面しています。これまでの教育は、多くはルールはルールだから守れ、注意しろ、危険に近づくな、というものですが、それではまずない



ところに問題があります。注意は内発的なものでないと身につかない。先生たちが外からあれこれ言っても身につかない。「注意しろ教育」をいくらやっても、アンケートをとると彼らは「事故の時は事故する」などと回答します。事故は起きるもの、注意しても仕方ないという意識が強い。そうした高校生たちが知識を自分自身の行動原理に結びつけ、内発的に注意する意思・意欲を育てるそのきっかけづくりが交通安全教育の基本です」。

「行動を通して体得させる」参加型教育へ

内発的に注意する手法として、高山さんが重視するのは「教え込み、守らせる」のではなく、「行動を通して体得させる」ことだ。たとえば、自転車通学をしている高校生たちに、交差点での自転車の行動パターンをビデオに撮らせて、これを教材に生徒同士で議論をさせる。どのような行動が危険なのかを考えさせる。問題はどこにあり、どうしたら危険でなくなるのかというところまで、議論させる。交通安全施設の改善案が出てくれば、生徒たちが自

身に警察など行政機関に要望させる。「そうすることで、人の生命を守り、事故を防ぐことにいろいろな人が関わっていることを知ようになります。そこには安全施設、安全なクルマ、安全な道路が必要だということもわかります」。

実技体験会ではクルマにはねられた人形を見て笑う子もいるが、「あれは本当は人形じゃなくて、人間なんだよ」と言う子もいる。その子には自ら交通安全を考えるきっかけになっているわけです。交通安全の世界は、多くの人が関わって実現する生命の大切さを広い視野で考えるものだと思います。高校3年間の教育が生涯、交通安全を考えていくきっかけになってくれればいいですね。実際に生徒同士の議論を見ていると、だんだんまじめになっていく。危険についてこういう可能性がある、ああいう可能性がある、想像力を膨らませて議論するようになります。ともすれば今どきの高校生は、という言い方がありますが、高校生が議論していく姿を見て、私はとても希望がもてます。高山さんの参加型教育への期待は大きい。